

2020 年 4 月 16 日

実践女子大学・実践女子大学短期大学部

教員研修 成果報告書（Web 公開用）

1. 所属	文学部 言語文化教育研究センター
2. 職名・氏名	教授・中山誠一
3. 研修期間	2019 年 4 月 1 日 ～ 2020 年 3 月 31 日
4. 研修先機関（国名）	Universiti Tunku Abdul Rahman（マレーシア）
5. 研修課題名	「国際語としての英語」熟達化モデルの開発
6. 研修経過 （月単位で記載してください） 例）4月上旬～5月下旬：	4月～5月：調査準備 5月～：協力者の募集と選定 5月～8月：第1期調査（60名） 8月中旬：the 28th MELTA International Conference にて調査内容報告 9月中旬：科研費調査のため渡米 10月中旬：ICERI 2019 にて中間報告1 10月～1月：第2期調査（40名） 12月中旬：調査内容（理論的背景）について Sunway University にてワークショップを実施 1月初旬：ICEPS 2020 にて中間報告2 2月～3月：調査結果の分析
7. 本研修で得られた成果等（論文・学会発表含む）	学会発表 1. Nakayama, T. (2019). “Does the L1+ approach based on findings in syntactic priming research promote sentence productions of Japanese English learners?,” the 28th MELTA International Conference, Kuching, Sarawak, Malaysia, August, 13 to August 15. 基調講演 1. Nakayama, T. (2019). “How can we explain the mechanisms of L2 learning based on priming research?,” The 9th International Conference on Education, Research and Innovation (ICERI 2019), Tsuru University, Tsuru, Yamanashi, Japan, October 25-27, 2019 2. Nakayama, T. (2020). “L1+ Approach its mechanisms and efficacy for L2 instructions,” The 7th International Conference on Education and Psychological Sciences (ICEPS 2020), Dong A University, Da Nang, Vietnam, January 06-08, 2020

	ワークショップ 1. Nakayama, T. (2019). “Does the L1+Approach Based on Findings in Syntactic Priming Research Promote Sentence Productions of Japanese English Learners?,” Sunway University, Kuala Lumpur, December 06. 論文 1. Nakayama, T. (2020). “Effectiveness of the Visual-Auditory Shadowing Method on Learning the Pronunciation of Kanji.” <i>Japanese Psychological Research</i>. https://doi.org/10.1111/jpr.12278 2. Nakayama, T. (2020). “How can syntactic priming studies contribute to the second language acquisition theory?,” 『実践女子大学文学部紀要』, 62, 31-40. 3. Nakayama, T. (2020). “Does the L1+ approach derived from syntactic priming research facilitate sentence production for Japanese English learners?, ” <i>CLEIP Journal</i>, 6, 23-37.
8. 所感	1. 英語による授業数の確保と授業外における学生支援の必要性: 本調査では、概ね学年を追うごとに、学生の英語運用能力が向上していることが判明した。ほとんどの学生は、授業以外では英語ではなく母語（主に中国語）を使用すると回答していることから、学生の英語運用能力の向上は、日頃英語で授業を受けていることによるところが多いと考えられる。本学でもグローバル・スタディーズ等で英語を主言語とする授業を展開し始めているが、まだ数が少なく、これらの授業がどの程度学生の英語力向上に影響しているかは疑問である。英語ができる学生を増やし育てるためには、言文センターの努力だけでは、限界があるのかもしれない。しかしながら、本調査では、授業以外で英語を使用する頻度により、学生の英語運用能力に大きな差があることがわかった。分析1でも述べたように、CFSに所属する15名が友人と毎日英語を話していると回答した。本学でも、授業外で、学生同士が自然に英語を使う機会を増やしていけば、英語力向上を期待できるのではないかと考える。例えば、留学生や本学学生で英語ができる学生にトレーニングを行いチューターとして採用し、英語ラウンジなどを設けていつでも学生が、友達感覚で英会話を楽しめる環境を作ることも今後考えてみたい。 2. 学生に対する評価方法の検討について: 本調査では、初級・中級の学生については、英語自己効力感の向上が実感できていないことが示唆された。本学学生の英語運用能力はほぼ、初級・中級であり、授業中における学生に対する評価（前向きな声かけ）等を十分に行う必要があると感じた。こうした取り組みを十分に行わないと、学生はやる気を無くしたり、課題への取り組みを諦めてしまう可能性があると考ええる。